

# 東北大地震被災展～広島・長崎原爆資料巡回展を通して

香月真大 (早稲田大学大学院建築学科石山修武研究室)

歴史上このような大地震は体験したことがない。東京の高円寺で体験した私は大地震の時に私は何もすることができなかった。あまりの大きな揺れに身動きすら出来なかったのを記憶している。あわてて外を飛び出すと余震が多く続き隣の洋服屋のビルの窓を見ればどれだけ地震が強かったのを物語っている。道路の自動車はまだ気づいていない人がいたかもしれないが、隣のおばちゃんは騒いでいたが、誰もが混乱していた。東京は比較的被害は少なかったが、まさにどの年代もほとんど体験したことのない、何物にも表せない大地震であった。知り合いの東北に拠点を置く大学の先生が心配になり、ニュースを見たところ震度7以上の揺れを観測したという警報が流れている。ただこのときは、気仙沼であのような事態が起きているとは夢にも思わなかった。津波で街全体が呑み込まれたというのを聞いた時に、原爆後の風景と重なった。戦争資料館を誘致する運動を個人的にやる中でメディアとしての写真、原爆後の惨状を写真展や展覧会などでも使用していたからこの東北の海岸沖で起きていることがどうしても長崎や広島の写真と重なったのである。大自然による厄災によって2万人以上が亡くなったということを聞いた。今なお見つからない行方不明者の安否は気になるところであり、ご冥福を祈りたい。

では私たちができることは何であろうか？

それは募金であれ、現地にボランティアに行くことであれ、食料や生活用品を送ることであれ様々な方法が存在すると思う。当初は自分で出来ることとして国内で使用されていない間伐材を使用した地元のDIY工房を通して生活用品を作って支給したり、現地に赴いてボランティアをすることも考えたが、私にできることは戦争資料を伝える写真展を通して得た経験を通した東北大地震被災展の巡回展を企画することであろうと思った。

原爆による被災もまた東北大地震と同じ放射能の問題をはらんでいた。福島原発の放射能汚染は原爆後の長崎と重なったのである。私の世代は原爆を直接体験したわけではないが、それを資料や体験者の話を聞くことで知ることにはできる。エノラ・ゲイから投下された原子爆弾リトルボーイとファットマンは20万人以上の人を死に至らしめた。その半分が放射能であった。

巡回展をするといっても大がかりにINAX銀座やギャラリー一間などを借りて行う方法も一つの方法であるが、誰もがそれを行うことができる地域の教会などの簡易な場所を借りて行くことを第一に考えたい。まず私は知り合いの東北に住んでいた写真家の知り合いと協力して東京の高円寺付近で回顧展をやることを試みた。被災地の現状をリアルタイムで流れるインターネットの情報などやテレビ放映よりもよりリアリティのある写真で伝えることができると考えたからだ。

広島平和記念資料館より資料提供を受けて戦争資料に関する展示は東京でも行われてきた。原爆後のがれきりや人々の動画などはアメリカ兵によって撮られたものが多い。これらの瓦礫の惨状は東北大地震の惨状と類似していた。自然による大厄災よりも大

きな被害を人間の手によって生み出したのである。ここでは東北大地震の惨状を表す写真展を広島・長崎の戦争資料展と併用して構成することにした。主な記録は映像・音声・写真の3点であると思う。

巡回展では「人間による厄災」と「自然による厄災」を対比させて巡回展を行うことにした。

まずは最初の一步として阿佐ヶ谷のルーテル教会を借りて写真展を行う。

自然による厄災は3月に起きた東北大地震である。現在も多くのボランティアや自衛隊の方々が被災地の支援を行っているが、まだ復旧にはめどが立ってはいない。特に被災者の生活のための仮設住宅問題もまだ根強く残っている。また被災後の瓦礫などの撤去も問題になっている。今では多くの国内外からのボランティア、自衛隊などが撤去にあたっているが、地域住民だけでは撤去しきれないぐらい多くのヘドロや海水による建築資材の腐蝕による悪臭なども問題になっている。現地では食料供給などは十分にまかなえずあるが、まだ就労の問題や被災後の都市のあり方など残された課題は多い。そこで東北出身の写真家と協力しながら巡回展をすることによって人々に東北の現状を伝えることが今の自分にはできることではないかと考えた。

未だ東北は多くの問題点を残しているが、今伝えるべきなのは、人々の生活、復興の様子、放射能の現状の3点であると考えた。

この3点を元にして構成する写真展を企画する。知り合いの中国人の作家は現地に赴き、中国にこの惨状を伝えるためにルポタージュを著して日本、中国、台湾などで出版を決めている。これらの東北大地震に関する資料なども販売形式で公開する。

建築設計者として展覧会などを数多く体験してきた経緯があるというのが、この企画展を考えた経緯であるが、一番大きな理由は建築家として現地に赴いても出来ることは限られていると思ったからである。多くの建築家達は被災地に支援に向かっているが現地で採用される仮設の木造住宅や間仕切りなども多くは著名な建築家の計画が採用されている。ここで若手の設計者が木造住宅や都市計画を提案しても行政施設などは全く聞いてもらえないという現状があった。特に佐賀県などで多くの人々を受け入れて、新しい自給自足型の農業都市計画などが建築家から提案されたが、同じく北九州市福岡県に受け入れ型の都市計画を提案したが、聞き入れても貰えなかった。東北大地震を通して非合法の震災を狙った商売などが氾濫していることもあり、警戒して聞き入れてもらえないということもあるだろうが、地元に住んでいるものとしてやはり無名な建築家には復興支援計画を聞き入れてもらえるチャンスも無いのだろうかかと正直嘆いたものである。

国内において実績の無いものは案を採用されることはほとんど無い。ましてや20代の設計者が出来ることは現地に赴いて、ボランティア活動を行う、生活用品を送るということに限られる。むしろこのような現実に成立しない計画を持っていくよりは展覧会の

経験を生かして巡回展を行う方が、被災地の現状を写真を通して体験して頂く方が少しでも意味のあることではないかと考えてこの企画の設立にいたった。この巡回展では東北大地震で起きた被災後の現状を写真展を通して映し出すと同時に、人為的な災害であった広島・長崎の原爆投下後の写真展も同時に行う。

これは今まで戦争資料の展示会を行ってきたからだけというわけでもなく、人為的な被害と自然災害による被害のあり方を地域の人々に知ってもらおうというだけのもではない。これら二つの災害に共通するものは放射能である。特に原子力を使用するか、使用しないかという問題は戦後日本で多くの議論がされてきた。

原子力が利用されている大きな理由は、エネルギーを大量に供給できるということ。原子力を持っているということで、核の製造技術を自国が保有しているということを外に示す。という二点であろう。

エネルギーの観点において原子力は日本全体の電力供給の4分の1を占めている。少ない資源で多くの電力を供給できる原子力は東電にとっても重要なものである。何よりも何万人もの作業員を雇うという雇用上のメリットも存在しているのである。この4分の1が失われるのは問題である。原子力が使用されつづけるのはこのようなエネルギー上の理由が存在する。もう一つの理由は先進国で核兵器を持たないのは日本だけである。隣国の中国は勿論のこと、フランス、イギリス、アメリカ、ドイツなどの先進国は核兵器保有国である。日本政府は核兵器を憲法上も事実上も持つことができない。しかし、核兵器を持つことは自国にとって他国の国々に圧力をかける強力な武器になる。そこで政府はエネルギーとして原子力の力を使う。保有することによって原子力の技術力を確保することでいつでも核兵器を作れる準備はあるということを示すために原子力エネルギーに力を入れたと言われている。自国で原理力エネルギーを使用し続けるというのは、外交政策においても利益をもたらすものであった。だからこそ原子力を完全に亡くすということはエネルギー上の問題からいっても難しい問題であると言えよう。

この放射能に関する共通の項目を通して、過去から現在へと繋がる広島・長崎原爆資料展と東北大地震被災地展を同時に行うことで

1. 自然災害と人口災害の脅威
  2. 原子力について再考すること
- を目的とした写真展を行う。

同時に行うというのは難しいことでもある。ただこの二つの日本の大きな災害は人工的なものと自然的な災害の中で最も大きなものである。

放射能の脅威を示すことになる原爆に関する情報は戦争資料展で行ってきた。草の根活動とともにやってきた高齢化による戦争体験者が少なくなる中で戦争資料館の存在意義を示すことを目的として広島・長崎の戦争資料巡回展は多くの場所を使用して行った。戦争資料展はどこでも行うことが可能である。高円寺のショップに付随するギャラリーでも行ったし、事務所でも行われた。戦争資料展は比較的何処でも行うことが容易である。資料は長崎原爆資料館、広島平和祈念資料館から提供して頂いたり、戦争体験者の祖父やその知り合いから写真や映像資料を提供して頂くことで容易に行うことができる。これらは建築展でもSDreview2010展で東京・大阪に行った。戦争資料展を行うことは昔から行われてきたが、これらはあまりに限定された場所、新宿センタービルの戦争資料館、靖国にある戦争資料館などが存在する。ただ世界最大の都市である東京においては戦争について語る場所もほとんど存在していないのが現状であった。若者で第一次世界大戦や第二次世界大戦による日本人の死者が

300万人に及ぶことや大東亜共栄圏のための戦争で諸外国では1200万人もの死傷者が出たことなどは全く認知されていない。イラク、エジプト、リビア、アフガニスタン情勢については上の空である。これは身近に戦争が世界で行われ続けているということを実際に認識できる場所が無いからである。これはあまりにも日本が安全で、豊かになったことによる。国内の若者も安全な日本から出ようとはしない。これを上の世代はガラパゴス鎖国と言ってあげてはいるが、他のアジア諸国はものすごい勢いで成長を続けているのに、危機感というものが気薄なのである。

戦争資料に関する巡回展を行うようになったのは若い世代、中高年の世代に当時の惨状を認識させるためであった。そのためには戦争資料館がいる。広島平和祈念資料館や長崎原爆資料館などで話を聞き、資料提供して頂く形式でこのような経緯で巡回展を行うようになった。

放射能というものは原爆の死傷者の半分以上を占める要因となったものであり、風によって運ばれるという性質を持ち、原子核がより安定するために出す放射線にかかることで被爆する。放射能の人間への殺傷力は長期にも及ぶことから原爆後の方が人体に悪影響を及ぼすのである。

これは福島原発でも同じである。大地震と津波による自然災害後に放射能漏れが確認されている。この原子力が生み出す放射能による問題は過去も現代でも同じである。戦争資料の巡回展と合わせて東北大地震被災展を行うことで過去と現代をふまえた上で災害に対する認識を理解することを目的として東北大地震被災展を行うことにした。

写真展という題目にしているが、資料提供では映像資料や音声資料も多くある。これらは出版物などの販売コーナーに隣接する形で設置することにする。情報メディアはインターネットで十分に情報を知ることができるが、実際の物としてのメディア媒体の効果は有効である。情報化時代に入り、インターネットや携帯などで書籍などを見ることが出来る時代になったが、未だに本や新聞の重要性は失われてはいない。それだけ手元で見て、触ることのできるメディアは重要性を持つからである。

写真展は写真や印刷の規格サイズで配置する。

人々の生活、復興の様子、放射能の3点をテーマにして配置するが、3つのテーマに分けて配置することにする。規模は最初の阿佐ヶ谷のルーテル教会で行うことにしているので規模は10～20m<sup>2</sup>ぐらいの場所があれば容易に行うことができる。隣接する販売コーナーでは売上と募金などで復興義援金として送ることを予定している。

重要なのは規模ではなく展覧会をやるということに意味があると感じた。行い続けていけば発展のしようがある。特に最初は阿佐ヶ谷の教会や高円寺の服屋のギャラリーを間借りしたりして巡回展を行いたい。戦争資料展のみは高円寺のギャラリーや代官山ヒルサイドテラスや大阪芸大のほたるまちキャンパスなどでも行ってきた。これらの経験をふまえて今回の展覧会を企画することにした。

・東北大地震現地で体験(被災地を中心にした写真展示)

※原爆後の被災地の写真展と対比させる形で配置する。

東京から高速バスで宮城県高田市の津波に襲われた地域を見ると何ものにも言い難い衝撃を感じることがあった。広島・長崎の原爆後の映像と同じ光景がそこにあるからである。自然災害というものは圧倒的な力で人々の生活を壊し、瓦礫の山々

に変えてしまったのである。そのあまりの強烈さにただただ呆然とするだけであった。スコップで土砂を除く作業をしたが、臭いだけでなく、この中にまだ数千人の行方不明者が埋まっていると思うと胸が締め付けられた。実際の津波に飲み込まれる瞬間を想像すると僕自身ですら何もできなさと感じた。特に逃げ延びれなかった人たちは高齢者が多かったので当時の状況を想像するだけで大自然の脅威を感じた。いまだ避難施設で暮らしている人たちのプライバシーのなさや、日本とは考えられないような環境で暮らしているのを見ると災害は簡単に人間の文明を潰していくのだということを実感した。ただ、現地の人々の話を聞く中で人間は強いと感じることがあった。匿名にして名前は控えたいがある避難先にいた高齢者は家を失い、財産まで失っていたが未来への希望だけを言っていた。「なんとかなる」である。このような言葉を自分がこのような目があったときに言うことはできるだろうかという気持ちになった。全ての財産や自分が人生を賭けて手に入れてきたものをほとんど失っても希望だけを述べる姿に僕は心打たれた。勿論、希望を失っている人もいるが生きているだけで再起できるんだという人間の強さを感じさせてくれる瞬間であった。環境的には最悪とも言える環境で再起を図る人の強さを一般の人々に写真展を通して知らせたいという希望を持ったのはこの時であった。むしろ放射能に関する問題は存在し、日本ではいまだ脅威になっている。ただ原爆のような原子力の甚大な被害は無いにも関わらず放射能についてここまでテレビや報道などで大々的に放送されるのは過去の原子力爆弾の経験が日本にあるからであろう。特に放射能の後遺症はヒロシマを舞台にした「はだしのゲン」などの漫画でも克明に描かれている。この過去の体験がここまで東京電力の原子力の管理の甘さをメディアが大々的に報道した一番の理由であると思う。過去の体験があるからこそ、このように原発に対しては被害者を出すことなく対応できたのだろう。この現地を見た実体験から過去と未来を繋ぐ為の展覧会を作ることはできないだろうか考えた。写真を通して人災と自然災害の驚異を人々に今一度認識させたいのである。

現場には未だに多くの瓦礫が残り、都市計画そのものや、新しい建設などはほとんど行われていない。それは清掃作業に多くがおわれているということと、行方不明者もいまだに発見されていないからである。死傷者を出した家族は被災した家族をいまも待っている。現在は多くの避難者が仮設の木造家屋に住んでいるが、抽選で住む人を決める制度のために住むところが決まっているのにその当選枠を留保して本当に住みたい人々のために住宅を供給できないでいる。システムがうまく回っていないのである。特に一列に並ぶように配置される仮設住宅にはコミュニティというものが生まれづらいのも問題である。これら多くの現状を写真に収めることによって展示する。

建築家として間仕切りを作ることでなく、仮設住宅のプロトタイプを提案することでもなく、伝える場所をみじかな場所に置くことによって実際の現状を知ってもらう。それによって擬似ではあったとしても人々の体験として記憶にはいり、今後二度とこのような災害を亡くすことの一助になりうると感じ、行動に移した。簡易な展覧会とはいえ、場所や資料を提供して頂いた人々には感謝しきれない。

#### ・写真展のキャプション

展覧会の経験によって写真展をするにはキャプションも重要なものとなっている。

展覧会をやる上でプレゼンテーションを行う際に最も重要なのはその作品を説明する文章であると思う。この文章はその写真に取められている現地の人々にインタビューを

して、キャプションとして利用するという方法を取った。現地でのおじいちゃん言葉から出てくる困難な環境にあっても希望を持っていきけるという決意などを写真とインタビュー形式のキャプションを通して知らせる。それを行うことが一番現地での体験を写真展を通して人々に伝えることができると思う。

特に被災地の展覧会をやる上で大事なものは現地のありのままを伝えることである。これは真実を伝えなくてはならない。これは原爆資料展でも同じことを感じた。嘘を並べて希望を持たせるよりも、被災による過酷な状況などを知らせるのが最も重要なことである。それを人々が知ることでより行動を起こして支援を行うことができるからである。今回の巡回展ではいまだに埋まっていない仮設住宅の現状やコミュニティの問題などを写真やインタビューを通して伝えていきたい。僕がこの大地震に自分の経験や利点を生かしながら出来ることとするならば原爆資料展を生かしながら、東北大地震後の被災地の現状を伝える写真展を企画することであると思った。被災後に半年の歳月が経とうとしているが、いまだに被災地で住む人々の雇用問題や住居問題などは対応をおわれている。この現状を考えた上で僕に出来ることは広く広告して、多くの人々によりこれからの日本に対して行動を起こしてもらおうことであろうと思った。まずは認識させることで全ては始まるからである。

大地震以降、人々の建築に対する考え方も大きく変わり、建築に対して構造上の強さや、安全性に対する考えが最重要視され、建築の在り方もミニマリズムと呼ばれる弱さや軽さを基調とする建築様式から大きく変わる転換点に来ていると思う。その中で建築設計者として出来ることを見極めて人々がより豊かで、生き生きとできる都市空間を模索していきたい。

今私たちに出来ることは現実と格闘しながらも挑戦し続けることであると思う。